ホーソーンの「若いグッドマン・ブラウン」における罪の意識について

上　野　征　支

On the Sense of Sin in *Young Goodman Brown*

Masashi UENO

要　旨

ホーソーンの短編小説「若いグッドマン・ブラウン」における主人公の罪の意識を中心に内容を分析し，作品の背景と作者の意図を考察する。

Synopsis

In this article I should like to examine analytically the contents of *Young Goodman Brown,* one of the Hawthorne's best short stories, considering chiefly about the sense of sin of the hero and to study the background of the work and the intention of the author.

I

ナサニエル・ホーソーン（Nathaniel Hawthorne, 1804－1864）は，その生涯において，代表作『緋文字』をはじめとする4つの長編小説と，いくつかの少年少女向きの読物や伝記物語等の他に，100編をこえる短編小説（随筆ふうのものも含めて）を書いている。そして，これらの長編や多くの短編を通じて，ホーソーンが取り扱った中心的なテーマは罪の問題であり，メルヴィルが"great power of blackness"[1]と激賞したのも，ホーソーンが人間心理の暗黒面を多く描いているところにある。ホーソーンは，人間の心に巣くう罪と罪の意識が人間の生活に与える心理的，道徳的な影響をシンボリカルに描こうとしたのである。それは，自己の内面生活を厳しくみつめ，強い罪の意識を抱いていたピューリタンを遠く先祖にもち，その血を受け継いだホーソーンが，作家としての出発当初から，悪の力の神秘的強大さ，意志と運命のもつれ，罪，悪の必然的結果などに強い関心を示し，さらに，経験の意味のあいまい性，孤立・孤独の絶望的破壊性，真実の暗さなどに興味を覚えたからであろうと思われる[2]，

ところで，19世紀初期のアメリカには，まだ頼るべき文学的伝統ができていなかったので，4才にして父を失って，幼少のころから孤独な生活を送ることが多く，早くからシェイクスピアのものをはじめ，スペンサーやバニヤンの作品を愛読していたホーソーンは，当然，ヨーロッパの文学に伝統を求めた[3]。

当時のヨーロッパ文学は，ローマン主義時代であり，小説では，ゴシック・ロマンス，歴史小説，海洋小説，センチメンタルな小説などが流行していた[4]。ホーソーンやポーやメルヴィルたちは，これらの文学形式を受け継いだのである。しかし，それはただ形式上のことだけであって，彼らは，ゴシック・ロマンスとか，歴史小説などの形式をかりて，彼ら独自の文学の世界をつくりあげていった。

それはシンボリズムの世界であった。すなわち，人間の心の奥をシンボリカルに表現する文学であった。時と所は，一見，リアリスティックに見えても，実は，時と所を越えたシンボリックなものなのである。

ホーソーンの場合，その作品の多くの題材は，アメリカ植民地時代のボストンやセイレムを中心としたニュー・イングランドの歴史に求められた。大学卒業後の10数年間，作家修業のため，実

＊助教授　一般教科英語

社会における体験の乏しかった[5]ホーソーンにとって，自分にもっと身近なニュー・イングランドの歴史や伝説は，彼の小説の材料にもっとも都合がよく，また，もっとも得やすかったからであろう。

かくして，ホーソーンの作品の多くは，ニュー・イングランドの過去に多くの題材をとったスコット流の歴史小説やゴシック・ロマンスの形をとってはいるが，実は，人間の犯した罪というものが，人々の心の深い暗い奥底に，どのような心理的影響を残しているかを探求した，一種の心理小説とも言うべきものである。ヘンリー・ジェイムズも，ホーソーンのすばらしさは，深層心理を尊重したことであると述べている[6]。

さて，ホーソーンの初期の短編『若いグッドマン・ブラウン』("*Young Goodman Brown*",1835年)[7]も，同じくニュー・イングランドのピューリタンの社会を舞台としており，一人の若者が，ある晩，森に出かけて以来陰気な懐疑家となってしまう物語である。次に，この作品の主人公の罪の意識を中心にして，ホーソーンが，いかに人間の心の問題，内面的な魂を外面的な事象によって象徴的に描いているか，またこの作品の意味と背景について考えてみたい。

II

先ず，この物語の主人公である善良な若者が，救いがたい陰気な懐疑家となるまでの経過を，筋を追って少し詳しく述べてみよう。

セイレム村でのある日暮れのこと，新婚3ヶ月足らずのグッドマン・ブラウン(Googman Brown)は，ピンクのリボンをつけた可愛い妻フエイス(Faith)がとめるのもきかず，「今夜だけは，これから明朝までにどうしてもしなければならない用事があるのだ。[8]」といって家を出，暗い森に向う。実は，彼は妻に内緒で森の魔女の集会に出てみたいという好奇心を抱いているのである。悪魔が魔女と森で集会を開き，悪の契約を結ぶという迷信を信じていたピューリタンの社会では，森は罪と暗黒の象徴なのであるが，ブラウンはそこへ行こうというのである。彼は家を出るとすぐ，妻のことを思って胸が痛むが，今夜一晩だけなら妻に知れず，問題は起こるまいと決めこんで暗闇の森へ入っていく。ブラウンは妻のフェイスの誠実，無垢を信じ切っているのである[9]。

さて，ブラウンが森に入ってまもなく，立派な身なりをした年配の悪魔が，蛇の恰好をした杖を持って彼を待ちわびている。それから彼らは森の奥へ進んでいくが，ブラウンはやがてためらいを見せはじめる。それは，彼が自分の先祖は昔から正直者で，信心深いクリスチャンであったと固く信じていたので，こんな森の道を通るのは一族の中で自分がはじめてだろうと考え，誇るべき家名に傷がつくのを恐れたからである。ところが，悪魔は彼の祖父や父のことをよく知っていて，彼らも彼と同じく悪魔の誘惑に負け，この道を通ったのだと言い，更に彼らだけでなく，多くの教会の執事や牧師や総督とか役人までもが森の集会に集まってくるのだと言って，ブラウンの確信を一つ一つ切り崩そうとするのである。そして半信半疑のブラウンの前方に，悪魔は魔法の杖で一人の女性の姿を指し示す。それは意外にも，ピューリタンの模範ともいうべき敬虔なグッディ・クロイズ(Goody Cloyse)夫人なのである。彼女は村で彼に教義問答を教え，教会の牧師や執事と共に彼の道徳的，精神的支柱となっている人物なのである。驚いたブラウンが木立ちにかくれて見ていると，彼女は魔女の恰好をして悪魔と親しく口をきき，「今夜の集会には，美男子の若者が連れてこられるので早く行ってみたいが，杖を盗まれて難儀している。[10]」と言い，悪魔から杖を借りて行ってしまう。ブラウンはその浅ましい老婆には大いに失望するが，やがてフェイスのことを思い出して，それ以上進むことを強く拒み悪魔と別れる。悪魔は，「いまにもっとよく分るようになるさ，もう一度歩きたいと思ったらこの杖を使うがよい。[11]」と言って森の闇に姿を消す。そこで，ブラウンは木の切株に腰をおろし，これで村の牧師や教会の執事にも，まともに顔向けができるし，危ういところではあったが，今夜はフェイスのもとで安らかに眠ることができると思い，内心ほっとする。

それからやや時を経て，後方に馬のひづめの音と二人の厳めしい男の語し声が聞えてくる。再び木立ちに身をひそめたブラウンには，暗くてその姿は定かではないが，その声は紛れもなく，彼の尊敬する当の牧師と執事のものであった。彼らは，「今夜の集会には，各地から仲間の牧師や魔術師たちが集まるだけでなく，若い美女が連れてこられるそうだから遅刻せぬよう急ごう。[12]」と話しながら，馬に鞭をくれて駈け抜けていく。あまりの意外さに，ブラウンは心臓も止まる思いで気が遠くなり，いまにも地面に倒れそうになる。彼がこれまで信じていたものがまた一つ，もろくも崩れ去ったのである。天国は本当にあるのだろうか

と訝りながら，彼は天を仰ぎ見る。空には青空が見え，星が輝いていた。それでブラウンは再度元気が出て，「頭上には天，地にはフェイスあり，おれはまだ悪魔と断固戦うぞ！[13]」と叫んで，しばし天に祈りを捧げる。

ところがどうしたことであろう。彼が空を眺めているうちに，風もないのに雲が出て，星を隠してしまったのである。そして雲間からセイレムの村で聞き覚えのある人々のばか騒ぎの声が響き，その中から若い女の悲鳴が聞えてくる。それはなんと彼の妻の声に酷似しているではないか。しかも，それを裏づけるかのように，黒雲が去った後に，フェイスのピンクのリボンが舞い降りてきたのである。ここに至って彼の気持ちは動転してしまう。「私のフェイスが行ってしまった！この世には善などない。罪とは名ばかりだ。悪魔よ来たれ。この世は汝のものだ。[14]」かくして，絶望のあまり狂気のようになったブラウンは，悪魔の置いていった杖をひっつかむと，哄笑をあげながら，暗黒の森の奥へ疾走していく。その様は，まるで悪魔さながらの最も恐ろしい姿であったという。

やがて，ブラウンはものすごい炎の燃え上がっている林間の空地に出る。そこでは，村の教会の聖歌隊で聞いたことのある讃美歌に似た歌が合唱されており，奥には四隅を松明で囲まれた祭壇ふうの岩があり，その上でも炎が赤々と燃え，あたり一面を異様に照していた。会衆の中には，村の有力者，敬虔な牧師，執事，貴婦人，未亡人，それに純真な乙女たちまでいて，自堕落で評判の悪い男女や，犯罪者，インディアンの妖術師たちと憶面もなく同席していた。やがて，讃美歌が別の歌にかわり，火がいっそう燃え上がって，上の方に煙の輪ができ，人々の顔をおぼろに照らす。そしてそこへ，身なりや物腰がニュー・イングランドの教会の聖職者に少なからず似た悪魔が現われ，「改宗者をつれてこい」と大声をはり上げる。ブラウンは木立ちの蔭から会衆の方へ近づく。そして煙の輪の中から前へ進み出よと手招きしている亡父の姿と，絶望の表情を微かに浮べながら引き返すよう警告している亡き母の姿を認めたように思うが，思考力も抵抗力もなく，例の牧師と執事に腕をとられて，燃え盛る岩の前に連れ出される。すると，向う側からも，ヴェールをかぶった女性（フェイス）が，敬虔なグッディ・クロイズと悪名高い魔女のマーサー・キャリアに連れられてくる。引き続いて，悪魔の説教が始まる。

「よくぞ来た。わが子らよ。汝らの種族の聖餐になる。汝らは，この若さで汝らの本性と運命を知ったのだ。わが子らよ，後ろを振り返ってみよ。……そこに，汝らが若い頃から崇拝している連中がすべているのだ。汝らは彼らが自分よりも神聖であると考えて，彼らの正しい生活や天国に捧げる熱心な祈りを，己れの罪と比較して畏縮していたのだ。だが彼らはすべてわが輩を崇拝するために，ここに集まっている。こよいは汝らも彼らの秘密の行いを知ることが許されているのだ。[15]」と悪魔は叫んで，そこに集まっていたピューリタンたちの多くの隠された罪悪をつぶさにあばき出す。そしてさらにことばを続けて，

「汝らは，罪に対する汝ら人間の心の共鳴によって，罪が犯されたすべての場所を —— 教会，寝室，野原，森林の中のいずこでも —— 見つけ出し，大地のすべては罪悪の汚点であり，一つの巨大な血痕であると認めて大いに喜ぶであろう。それどころではない。あらゆる悪事の根源であり，人間の力 —— わが極限の力 —— が行為に表わしうる以上の悪の衝動を無限に供給する罪の深い神秘を，すべての胸に見抜くことが汝らの務めとなるであろう。さあ，わが子らよ，互いに見つめよ。[16]」

と命じる。一同が見合う中で，哀れなブラウンとフェイスは，互いの姿を認め，罪深い祭壇の前でふるえていた。最後に悪魔は，

「汝らは，これまで互いの心を信じ合い，美徳は全くの夢ではないと期待してきた。だが，いま汝らは眼がさめたのだ。悪は人類の本性である。悪のみが汝らの唯一の幸福にちがいない。本当によくぞ来た，わが子らよ，汝らの種族の聖餐にな。[17]」

といって，血か，あるいは燃える液体かとも思われる真赤な水の入っている岩の水盤に手を浸して，若い二人の額に悪の洗礼を行おうとする。そのとき，ブラウンは妻に向って，

「フェイス！フェイス！天を仰げ，そして邪悪な者に抵抗せよ。[18]」

と叫ぶ。さて，フェイスがそれに従ったかどうか，彼にはわからなかった。というのは，彼は叫んだとたん，われに返り，気がついてみると，冷たく湿った岩にもたれ，頬に冷い夜露をうけて，真夜中の静かな森の中に，只一人いたからである。

翌朝，ブラウンがセイレムの村に帰ってみると，牧師は食欲増進と説教の想を練るための朝の散歩をしており，執事のグッキンは，家庭礼拝中で，窓から祈りの言葉が漏れていたし，グッディ，クロイズはミルクを運んできた少女に教義問答を教

えていた。そしてフェイスはどうかというと，彼女はピンクのリボンをつけていて，心配そうにこちらを見つめていたが，夫の姿を目にとめると，急に喜んで路をとんできて，村人の前もかまわず，彼にキスをしょうとする。しかし，ブラウンは妻の顔を厳しく悲しげにのぞき込んで，挨拶もせずに通りすぎていくのである。

そして，この物語の結末で，作者は次のように述べている。

「グッドマン・ブラウンは，森の中で眠り込んで，魔女の集会という荒唐無稽な夢を見たにすぎなかったのか。そのほうがよいなら，それでもいい。しかし，ああ，それは若いグッドマン・ブラウンには，悪い前兆を告げる夢であった。あの恐しい夢を見た夜を境として，絶望的とはいえぬにしても，気難しい，物悲しい，暗く瞑想的な，懐疑的な人物となってしまったのである。[19]」

たとえば，彼には安息日の聖歌が罪の聖歌として耳に鳴り響き，牧師の説教も冒瀆者のことばに聞こえ，彼らに下る天罰を恐れた。また，夜中に突然眼をさましてフェイスの胸から身をはなし，家族が朝夕の祈りを捧げていると，顔をしかめて出ていった。そして，ブラウンは長生きしたが，死に際は陰惨なものだったというのである。

さて，以上が大体のあらましであるが，この物語は，幻想的な魔女の集会を中心として展開されており，悪魔や魔女をはじめとして，たしかに夢の中でしか起らないような超自然的な能力を具えた人物や事件が多く，ゴシック・ロマンスの要素を多分に取り入れた作品なのであるが，単に怪奇恐怖を目的としたこれまでのゴシック・ロマンスとは異なって，それらの要素を主人公の心理の象徴としているところに，大きな特徴が見られるのである。すなわち，この物語において，ホーソーンは，心の中に芽生えた邪悪な欲望をめぐって，罪の意識と葛藤の末，陰うつな懐疑家に変貌した主人公の心理変遷の過程を，森の魔女の集会を中心とした幻想的なドラマによって，象徴的に描いているのである。そしてまた，この物語においては，後にフロイトによって論理的に明らかにされた人間の心理的作用が，美事に描かれているのであるが[20]，次にその点を考えてみたい。

III

フロイトは，『精神分析入門』において，人間の心は超自我，自我，エスという三つの領域に分かれるといい，これらの三領域相互間の関係について，次のように述べている。

「……自我はそもそも知覚体系の諸経験から出てきたものであるから，自我が外界の諸要求を代弁するというのは自我の宿命なのです。しかし同時にエスの忠実な召使いとなり，エスと和合し，自己をエスのお気に召す対象として自己推薦し，エスのリビドーを自分に引きつけようとします。エスと現実との間の仲をとりもとうとして，自我はしばしばやむを得ず，エスの無意識的命令に自己の前意識的合理化の着物を着せ，エスと現実との軋轢をとりつくろい，巧みな駆引で現実を顧慮しているかのように見せかけます。たといエスが頑固でそれをあくまでも聞き入れないような場合でもそうなのです。他方自我はいついかなる場合でもきびしい超自我に監視されており，超自我はエスおよび外界の側からのいろいろな難題を一切無視して，自我に対して，行動の一定の規範を突きつけ，自我がそれに従わない場合には劣等性と罪悪意識という緊張感情をもって自我を罰します。このようにエスに追いまくられ，超自我に締め上げられ現実に突き飛ばされて，自我は，自己の中にはたらき，自己に対して働きかけてくる諸勢力や影響を受けとめながら，何とかして調和を作り出すという自己の経済的任務を遂行しようと奮闘するのです。我々はよく，生きることは容易ではない，という嘆声を抑えることができないのですが，それも無理はないのです。自我は自分の弱みをさらけ出さざるをえなくなると，突如として不安の状態に陥ります。外界に対しては現実不安を，超自我に対しては，良心と不安を，エスにおける情欲の強さに対しては神経症的不安を発生させるのです。……[21]」

つまり，超自我は，厳しい道徳規範の代弁者として，自我を指揮，監督する心的機関であり，自我は，超自我の指示に従って，本能的欲望の発現機関であるエスの欲望を吟味し，それが正当な場合には実現し，不当な場合には拒否する心的機関なのである。そして，この三つの心的機関としての超自我，自我，エスの相互作用や葛藤が，人間の精神活動とその生活に深くかかわっているのであるが，上記引用文の説明は，前項で述べたグッドマン・ブラウンの心の葛藤とその後の変貌の様子をまざまざと想起させるのである。

従って，この物語においては，心的機関の関係は，エス＝悪魔の言動，自我＝グッドマン・ブラウンの言動，超自我＝グットマン・ブラウンの良心，と置きかえて考えることができよう。先ず，

冒頭で，善良なクリスチャンの若者グッドマン・ブラウンが,「今夜だけはお前をおいて行かねばならない。[22]」と妻にいって，こともあろうに日暮れに，暗黒と罪悪と異教の象徴ともいうべき森へ出かけていくのは，彼の胸中に，なにかよこしまな一物が潜んでいることを物語るものであり，結婚3ヶ月の若者が妻の束縛から解放されて，一夜の恋の冒険を求めたことを想起させる。もちろん，ブラウンが出かけるのは，悪魔からの誘いがあって，会う約束をしていたからなのであるが，このことは,悪魔なるエスがその本能的欲望の達成を，ブラウンなる自我に働きかけ，自我はエスの要求を受け入れて，その実現を計ろうとしたことに外ならないのである。

これに対して，良心の法廷であり，道徳規範の代弁者である超自我は，さっそく自我を戒めるのであるが,

「かわいそうなフェイス，こんな用事で彼女をおいてくるなんておれはなんと浅ましい奴なんだろう。[23]」というブラウンの自責のことばは，その間の事情を物語っている。しかし，なお,「おれはこの一夜が終われば，彼女のスカートにしがみついて，一緒に天国まで行くさ。[24]」といって，エスとの「和合」をも志向する自我は，エスの要求を完全に拒むこともしないのである。

そこでエスは自己の欲望の早期実現を自我に催促する。森でブラウンを待っていた悪魔が,「さあ，グッドマン・ブラウン，まだ旅の始まりだから，こんな歩き方では遅すぎる。[25]」といって杖を借そうとするのは，そのことを意味しているのである。

ところが，ブラウンが,「ここで会って約束を果したので，これからもと来たところに引き返したい。例の件については気が進まない。[26]」といって，足を止めてしまうのは，自我が結局は，超自我の規制によって，いったん引き受けたエスの要求を拒否したことを意味する。

そこで悪魔は,「そんなことを言わずに，歩いていこう。歩きながらわけを話すから，私の話に得心がいかなければ，引き返してよい。[27]」と言葉巧みに誘い出す。そしてブラウンが,

「父は，こんな用件で森の中に入ったことは決してなかったし，祖父だって同じです。私たちは殉教者の時代から現在まで，正直者の一族だったし，善良なクリスチャンだった。ブラウンという名前を持つ人たちの中で，こんな道を選び，通っているのは私が最初です。[28]」

といって，一族の家名と信仰を気にかけるのは，エスの自我に対する厭くなき要求に対して，超自我からの自我に対する統制が一層強まったことを意味しており，このへんから，自我に対する，超自我とエスとの相克葛藤が激しくなるのである。

悪魔はブラウンに対して，彼の先祖も，現在のニュー・イングランドの多くの聖職者や役人たちも皆自分の知り合いであり，魔女の集会へと共にこの道を通った間柄である，といって彼らの秘密の罪悪をあばき立てるのである。そして，容易に信じようとせぬブラウンに対して，悪魔はまず，ブラウンの道徳的，精神的支柱の一人であり，敬虔な家庭婦人の模範であるグッディ・グロイズを淫靡な魔女として描いてみせ，次いで，もう一方の支柱である俊厳な牧師と執事の浅ましい秘密の姿を見せつけるのである。

このことは，超自我が自我に，社会の道徳規範の具現者としての名誉ある祖父や敬虔な牧師や執事や淑女を想起させることにより，自我がその道徳規範に従ってエスの邪悪な欲望達成を拒絶するよう命令するのに対して，エスは，家名も信仰も虚偽のものであって，社会の道徳規範の具現者とみなされている人々も，実はその仮面の下でエスの欲望の達成を求めており，エスの欲望こそが実体であって，超自我が代弁する道徳規範は欺瞞であり，空虚なものであるのでそれに従うことも恐れることもないと，自我に信じ込ませようとしていることを意味しているのである。

自己の道徳的，精神的支えである人々に対する尊敬，信頼の念を一つずつ切り崩されていくブラウンは，それでも天国（Heaven）と自分の妻フェイス（Faith）だけは信じたいと思う。しかしながらそれも束の間,天は暗雲におおわれ,雲間にフェイスの声がかき消えてピンクのリボンが落ちてくるに及んで，一切が不信の奈落の底につき落されたブラウンは,「私のフェイスは去った。この世に善などない。罪とは名ばかりで，この世は悪魔のものだ。」と叫んで,「人間を邪悪に導く本能のままに[29]」，狂人の如く魔女の集会に向うのであるが，これは自我が，最後の唯一の拠りどころである誠実な妻（信仰）までも失なって，一切が信じられなくなり，超自我のいう社会の道徳規範を虚偽とみなし，超自我の一切の統制を排して，エスの欲望達成に踏み切ろうとすることを意味している。

そして祭壇の前で，悪魔がすべての人の秘密の罪悪をあばき立て,「悪が人間の本性であり，幸福

にちがいない」と説いて，ブラウンとフェイスに悪の洗礼を行なおうとするのは，自我が超自我との連結を絶ってエスの要求に盲従し，まさに心の主導権をエスに奪われんとする姿である。

しかし，そのとき自我は初めて，それが自己の主体性の喪失を意味することに気づくのである。自我が一方的なエスの欲望の単なる実施機関となりさがることなく，エスの欲望実現の要求に対して取捨選択の権限をもち，心の主体者となるためには，自我はどうしても超自我と連結しなければならないのである。

従って，悪の洗礼が行なわれようとした最後の一瞬に，ブラウンが「フェイス！フェイス！天を仰いで，邪悪なものに抵抗せよ。」と叫び，とたんに魔女の集会が消滅したのは，自我が再び超自我との連結を確立し，超自我の代弁する道徳規範の遵奉者にたちかえり，エスの欲望の達成を最終的に拒否して，その主体性を取りもどしたことを示しているのである。

しかし，邪悪な性的欲望をめぐりエスと超自我との相克葛藤の板挟みとなって苦しんだ自我は，以前よりも道徳規範のより強固な遵奉者となってしまい，邪悪な欲望に関するエスの活動を一切厳禁し，心の無意識層に抑圧してしまうのである。そして今や道徳規範の忠実な遵奉者として，邪悪な欲望を憎悪する自我にとっては，その欲望が自分の支配する心の奥底に潜んでいることが，絶えざる不安の原因となるのである。そこで自我は，その欲望は自分の心に潜んでいるのではなくて，他の人々の心に潜んでいるのだと信じ込むことによって，その不安の解消を計るのである。

かくして，ブラウンは自分以外のすべての人々に秘密の性的罪悪を想定せずにはおれない陰気な懐疑家となったのである。そして一生を不信，孤独，疎外のうちに過し，「死に際が陰惨だったので，墓石に刻んだ碑銘は決して希望に満ちたものではなかった。[30]」という結びの言葉が示しているように，来世における救いも得られないのである。ブラウンの悲劇は，「人間は根本的には不完全であるという悲劇的認識[31]」をもたず，外界と心の内の両面に善悪混淆のあいまいさがあることが理解できなくて，一方的に善もしくは崇高なものに対する現実感覚を失ったことの必然的な結果だったのである。

以上のようにこの物語においてホーソーンは，人間の罪の意識とその変遷の過程を，魔女の集会をめぐる主人公の森の経験を通して心理的，象徴的に美事に描いているのである。

次に，この作品の背景と意図について考えてみたい。

Ⅳ

ホーソーンはそのロマンス論において，作家は，芸術品としての法則を守り，人間の心の真実を描くかぎり，その形式や素材をかなりの程度まで自由に選択することができるという。この自由な手法も，虚像を剝き出しに現わさないで，ほのかな香りのするように，強くもなく弱くもなく，注意深く描き出すことが肝要である。つまり「現実と想像が相合して，各々他のものの持っている性質と融合するような中立地帯」が理想であるというのである。

したがって，ロマンスという非現実の想像の世界に現実性を加味するために，ホーソーンは多くの場合，植民地時代の歴史をとり上げているのである。このことは，「若いグッドマン・ブラウン」についてもあてはまる。

魔女の集会を中心として展開されるこの幻想的なドラマに，いかに現実性を加えるかに作者が腐心していることがわかる。それは物語の舞台がセイレム村に設定され，作中の魔女の名前，グッディ・クロイズ(Goody Cloyse)，グッディ・コーリィ(Goody Cory)，マーサー・キャリア(Martha Carrier)がすべてセイレムの魔女裁判に関係した実在の人物の名前であることや[32]，クェーカー教徒を迫害したり，魔女と関係があったと森の悪魔が説明[33]しているブラウンの先祖は，作者自身の先祖を暗に示していることからも明らかである。このように，魔女裁判はこの物語の中心では決してなく，ただそのプロットに巧みに利用されているだけなのであるが，しかし反面，ホーソーンの関心と罪の意識は，このセイレムの魔女裁判と大きくかかわりあっているのである。

17世紀末のニュー・イングランドでは，ジェームズ二世によるマサチューセッツの勅許取り消しにより，植民地の自治的性格が多分に失われ，開拓線の部落にはフランスとインディアンの攻撃が行なわれ，天然痘が流行し，村落の土地所有権と境界線に関する内紛が続くなどして，政治的，社会的に不安が高まっていた。当時はまだ一般に超自然的なもの，魔法と悪魔の実在が信じられていた。聖書を文字通りの意味に解したピューリタンは，悪魔と魔女に対しては特に敏感であったので，社会の擾乱はまさに悪魔の所業と考えられた。こ

うした社会不安が高まる中で，1692年に治安判事たちは，セイレム村に魔法の陰謀があることを発見し，魔女狩りが行なわれたのである。この年2月29日にセイレムで三人が逮捕されたのを始めとして，魔女狩りは，たちまちボストン・アンドーヴァ・グロスター，チャールズタウン，ソールズベリーと，セイレム週辺の地域一帯に広がり，容疑者は200人近くにふくれあがった。最初に有罪の判決を受けた31名のうち，その年の6月10日の処刑を皮切りに，9月22日までに20名が絞殺された(34)。治安判事たちは法律の専門家ではなかったので，まず聖書をくまなく調べ，「魔法使いの女は，これを生かしておいてはならない」(出エジプト記第22章18節）という聖句を受け入れ，内外の先例にならったのである。裁判では，ヨーロッパで行なわれてきたのと同じような尋問と拷問によって虚の自供が引き出され，次々に共犯者が作られた。

その場合もっとも重要なことは，魔女の識別法として，悪魔は罪のない人の「形」をとれないという恐しい生き霊（fetch, specter）の証拠が認められたということである。そのために告発人の幻覚，夢，空想が被告の行動の証明として法廷で受け入れられた。それは反証のできない証拠であった。そしてこの魔女裁判を担当した判事の一人が，作者のニュー・イングランドにおける2代目の先祖ジョン・ホーソーン(35)であったのである。

作者ホーソーンの先祖の罪に対する意識は，多分にこの実体のない陰影にもとずいて人々を罪におとしいれた点に起因しているのである。ホーソーンが多くの作品において追究した主要なテーマ「許すことのできない罪」は他人の心の中に罪悪を求めて冷たく探ること，すなわち，「固執観念的な興味をもち，冷たい客観性をもって他人を研究する(36)」ことなのであるが，森の悪魔がブラウンに執拗に説いたのもこの点であったのである。そして結局，この罪を犯すことになったブラウンにホーソーンは救いを与えていないのである。

さらにまたホーソーンは，この審問に認められた陰影を巧みに利用して，この物語の幻想性を高めているのである。すなわち，ブラウンが森で経験する一切の事件が，そこで遭遇する人物も含めて，すべて夢や幻の如く実体のないものとして描かれているのである。

たとえば，森でブラウンを待っていた悪魔は"the figure of a man"(37)であり，魔女のグッデイ・クロイズは"a female figure"(38)，ブラウンの祖父は"the very image"(39)又は，"shape"(40)，会衆は"a grave and dark-clad company"(41)，煙の中の両親とおぼしき者たちは"the shape"(42)と"a woman with dim features"(43)，フェイスは"the slender form"(44)であり，最後に演説をする悪魔は"the dark figure"(45)又は"the sable form"(46)であるというふうに，ブラウンが森の中で見たすべてのものは客観的な証拠を示すことのできない陰影ばかりなのである。

ホーソーンはこのような陰影と実像とを巧みに組みあわせて物語を展開しているのであるが，自己の邪悪な欲望のかげを他人の中にのみ認めて，周囲の人々に対する疑惑と不信にとりつかれたブラウンの姿は，他の人々に罪悪の影を追い求め，陰影の証拠をもとに魔女狩りに狂奔したピューリタンたちの姿に一脈通ずるものがあるのである。ここにピューリタンの苛酷な厳しさや独善的な偏狭さに対するホーソーンの厳しい批判が表明されているように思われる。

しかし，ホーソーンはこの物語において単にピューリタンを批判しているのではなく，ブラウンの中に人間の心の分裂，善と悪，信と不信，神と悪魔との二元への分裂を描くことによって，あいまいな錯綜にとらえられてもがき苦しむ人間の真実の姿を示しているのである。そしてそれを主人公の幻想的な森での経験を通して，心理的，象徴的にみごとに描いているのである。

（注）

1）Bernard Cohen : The Recognition of Nathaniel Hawthorne. (The University of Michigan Press, 1969) p.33

2）大下尚一編，講座アメリカの文化Ⅰ，ピューリタニズムとアメリカ（南雲堂，1969年）p.242

3）Randall Stewart : Nathaniel Hawthorne－A Biography (Yale University Press, 1961) p.p.4－5

4）福原麟太郎，西川正身監修，英米文学史講座8，19世紀Ⅱ（研究社，昭和36年）p.200

5）Henry James : Hawthorne (Great Seal Books A Division of Cornell University Press, 1956)p.21

6）Ibid, p.72

7）最初The New England Magazine誌に発表され，1846年に短編集Mosses from an Old Manseに入れられた。

8）Nathaniel Hawthorne : Young Goodman Brown (The Centenary Edition X, Mosses From An Old

Manse, Ohio State University Press,1974)p.74

9) Faith は 17 世紀にはよく使われた名前であるが，作者はこれを誠実，信仰の象徴として用いていると思われる。

10) Nathaniel Hawthorne : Young Goodman Brown p.79

11) Ibid, p.80

12) Ibid, p.81

13) Ibid, p.82

14) Ibid, p.83

15) Ibid, p.p.86-87

16) Ibid, p.87

17), 18) Ibid, p.88

19) Ibid, p.89

20) 元田脩一著，アメリカ短篇小説の研究（南雲堂，1972 年）p.p.52-58

21) 懸田克躬，高橋義孝訳，フロイト著作集 I，精神分析入門（正・続）（人文書院，1971 年）p.p.446-450

22) Nathaniel Hawthorne : Young Goodman Brown p.74

23), 24) Ibid, p.75

25), 26), 27) Ibid, p.76

28) Ibid, p.p.76-77

29) Ibid, p.83

30) Ibid, p.90

31) F. O. Matthiessen : American Renaissance (Oxford University Press, 1968)p.p. 179-180

32) Neal Frank Doubleday : Hawthorne's Early Tales, A Critical Study (Duke University Press, 1972)p.202

33) Nathaniel Hawthorne : Young Goodman Brown. p.77

34) 森島恒雄著，魔女狩り（岩波新書，1972 年）p.185

35) George E. Woodberry : Nathaniel Hawthorne (Republished by Gale Research Company, Books Tower, Detroit, 1967)p.2

36) Hyatt H, Waggoner : Nathaniel Hawthorne (University of Minnesota Press, 1962)p.13

37) Nathaniel Hawthorne : Young Goodman Brown. p.75

38) Ibid, p.78

39), 40) Ibid, p.79

41) Ibid, p.84

42, 43), 44), 45) Ibid, p.86

46) Ibid, p.87

（昭和 52 年 11 月 30 日受理）